

中田かわら版 3月号

～中田地区の地域活動をお知らせします～

発行：中田連合地区経営委員会
制作：中田かわら版制作編集委員会

協力：中田連合自治会 泉区役所
横浜市踊場地域ケアプラザ

■この人に会いたい<50>



全国札所巡り 木下 良江さん (富士見丘)

木下さんは父親の事業の関係もあって、子供のころ頻りに空襲に遭っています。横須賀から強制疎開で平塚に行ったときに遭い、住まいの庭に突き刺さった不発弾に近寄って見たようです。次は静岡県清水市で艦砲射撃により実家を焼かれています。カノン砲の水平に飛ぶ弾道が忘れられないのだと。その前に平塚から見た東京大空襲はまるでかぶりつきの舞台のようだったと言う。灯火管制下の闇夜の視界では、高射砲と焼夷弾と火炎地獄と化した街が浮かび上がって見えたのでしょう。70年以上経った今もあの時の震えは憶えていると言う。

今の木下さんの様子はそんな戦火をくぐり抜けて来たというよりは、乳母日傘で育てられたように見受けられます。柔らかくのんびりと笑う。だが、話を伺えば小柄ながら実にパワフルな生き様でした。

まずは「御詠歌」をあげます。真言宗、浄土宗などの宗派を問わず寺々に伝わる「和歌」を唱えるのです。時には新幹線を4両ほど借り切った車内で、右手に鉤杖(シモク)、左手に鈴(レイ)を持って通路を踊りながら、詠いながら…だそうです。(横溝正史さんが喜んで使いそう…、失礼)

そんなきっかけもあって寺巡りに始まり札所巡り、地蔵巡り、観音巡り、薬師巡りと発展して、御朱印帳や記録帳が何十冊にもなっているようです。「今までに何件巡りましたか？」と問えば「?!、……」でした。数えることはとっくの昔に辞めたそうです。木下さんにとっては件数など意味が無いことかもしれせん。愚問中の愚問でした。

太極拳は30年。指導者として20年。泉寿荘で3教室、旭区の福祉センターで2教室、上飯田福祉センターで1教室。それぞれで月2回なので月12回は指導に当たっています。

また、5歳年上のご主人とはアマチュア無線にはまり、二人して免許を取得してアンテナタワー(ちょっと高額だったけど)を設置し、各種機器を揃えてどっぷりとハマったそうです。外国との交信は勿論深夜路走行中に車載器がSOSを



秩父三十四観音巡り

殿場インターを下りて警察義務だそうです。

懸りになり少し調べてみま空襲があり、10万人が亡くしました。原爆投下の広島、悪の空襲被害でした。この

昭和20年頃の情勢が気した。3月10日は東京大なり、100万人以上が被災長崎を除けば世界史上最時に使われたM69焼夷弾

上空で四散するタイプで、四散後に点火して火の玉となって地面に落ちる」とあります。木下さんはその光景を平塚の海岸から見てしまったのです。その後、4月4日、静岡・清水で夜間爆撃190人以上死亡。7月7日清水空襲151人死亡。7月31日清水市へ駆逐艦 艦砲射撃44人死亡。8月1日、清水市へ爆弾投下32人死亡。その他7月30日、8月2日も記録にあります。その様子を想像しようとしても不可能であるし木下さんも多くを語らないのですが、あえて推察するに「戦争の無残、無慈悲」さは小学女子の心の奥底に必ずや記憶されたでしょう。命を尊び平和を求める願いをひたすら神仏に届けようと、6年前ご主人を見送った後も札所巡りは終わることなく続けていると言う。最近行ったのは養毛観音堂、日向薬師など。近々、長崎五島列島へ。

(編集委員 松本 正)

～一人ひとりがCO₂を減らす努力をし、美しい地球を子どもたちに残そう!～



このチラシの情報をより詳しく知りたい方は、踊場地域ケ
アプラザ 葛西（かさい）まで問い合わせください。

TEL 801-2114 FAX 801-2923

■中田の歴史記念物<3>



双体道祖神塔

中田の「さいと焼き」(戸塚苑)

葛野氏子中と地元戸塚苑自治会、地元有志による恒例「さいと焼き」が1月14日、双体道祖神塔の前の広場で行われた。この日、集まった世話人は16人。正月用に飾られたしめ縄や門松、破魔矢、御札など山と積まれたのを焼いて疫病や災いを追い払うという願いが込められている。

道祖神前の広場(6m×4m)にトタン板2枚が敷かれ、その中央に道祖神前の丸い石(写真・直径約12センチ)が置かれる。これが双体道祖神の身代わりになって火を被り、人々を災いから追い払う役目を果たす。

山と積まれたしめ縄などに点火されると、火は勢いよく燃えあがる。近隣の人たちが、この日までに置いていった量はふた山くらいにもなる。火が落ち着いたところで代表の森 俊男さんから「今年も無病息災を祈って、この1年また安全でありますように」とあいさつ。午後3時過ぎから始まり、燃え尽きるまでおよそ1時間半かかった。本来ならば白、赤、青の3色のおもちを三つ枝につけて焼いて、集まっている人たちに振る舞ったものだが、3年ほど前から諸般の事情で今はやっていない。

昔は、この辺一帯は山だったので火災の心配もなかった。「さいと焼きには、たくさんの方が集まって豪快にやったもんです」と農家の人たちは懐かしむ。現在は住宅が密集し火災防止のため縮小し、伝統を受け継ぎながら行っている。今回分かったことだが、これを準備するのも大変なのだ。数日前から道祖神の周りの雑草取り。

持ち込まれた何10束という門松を包んだ新聞紙をとり除く。新聞紙は燃えると黒焦げになって空中高く舞い上がり危険なため。その他プラスチックや燃えないものの分別作業など。最後に残った灰は土に穴を掘って埋めていく。一段落したところで全員そろって、お神酒で「ご苦労様」で乾杯。ミカンやお菓子を集まってきた子どもたちや若いお母さんにプレゼント。およそ100年前から行われている民間信仰。和やかで心温まる行事だった。(宮田貞夫)



さいと焼きを見つめる人たち

■泉区・第九フェスティバル実行委員会

泉区民に「歓喜」と感動

2月2日、泉公会堂でベートーベンが「歓喜」の合唱で甦った——。「平成が新しい元号に代わる記念に」と企画、上原敏博さん(同実行委員長)が泉区民に募集を呼び掛けたところ、予想の倍以上の142人が参加した。9月から月、平均4回のペースで約20回の練習。情熱を燃やし指導に当たった先生、それにこたえチャレンジ精神と努力の結晶が「歓喜」の歌でみごと、大成功をおさめた。会場からは「よくやった!」など温かな声援と拍手が。第4楽章の27分のドラマは泉区民に誇り、そして大いなる希望を与えてくれた。(宮田貞夫)



フィナーレで舞台挨拶

「中田白百合地域情報サイト」にて地域の最新の情報や、かわら版バックナンバーなどを調べることができます。www.odoriba-cp.jpへアクセス!!